

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年10月14日(金)

その1 通算266号

◇ 輝く姿 (岡崎市小学校体育大会 バレーボール競技にて)



2週間も経とうとしているのに、印象に残る子供たちの輝く姿が忘れられない。その輝きは色褪せることなく、時の経過とともに光量を増すばかりだ。

9/29(木)、キッズデイズ2日目。小学校体育大会女子バレー南ブロック大会での話。試合会場の六名小には、1・2回戦を勝ち上がった小学校4チームが集まった。その一校が、惜しくも3位となった六ツ美南部小(六南小)である。六南小は、優勝校と大接戦を演じた準決勝で、優勝カップの輝きをも凌ぐ輝きを放つ。

バレーボールは、6人の選手がコートに立ち、勝利を目指して戦う団体競技。「スタメン」と言われる先発出場の6人の選手は所謂レギュラーで、レギュラーが背負う背番号は1番から始まる若番が多いのが通例だ。よって、背番号1から6の選手がスタメンの学校が多い。その中で、六南小の8番の選手に目が留まる。

『大会前の短期間で急激な成長を見せた伸び盛りの選手だろうか…。もしくは、下の学年の選手かな。いずれにしても、監督から認められてスタメンを託されたのは注目だな…。』などと勝手に想像しているうちに、準決勝戦が始まった。

六南小と対戦するチームは、超小学生級のスーパーエースを擁する優勝候補のA小。この背番号1のエースがすごかった。プレーに有利な高身長を備え、かつ高い技術も備える。試合前練習では、強烈なスパイクを狙って打ち分け、フェイントも上手い。放たれるサーブは、何とジャンプサーブだ。このまま中学生チームに入っても、すぐにスタメンを張れる勢いだ。さらに背番号2番、3番と巧者が揃う。

六南小の圧倒的不利かと思いきや、第1セット序盤からの連続得点で六南小が流れをつかむ。ところが、A小も負けていない。厳しい状況を打開するのがエース。強烈なスパイクとサーブで反撃開始。あっという間に同点だ。ここから引き離されるかと思いきや、六南小はしぶとく粘る。何度も相手に行きかけそうになる試合の流れを何度もたぐり寄せ、点を取り合いながら試合は終盤へ。大接戦だ。

六南小が、なぜ相手にある流れを渡し切らなかったのか。相手にある流れを何度もこちらに引き寄せせるのか。プレーをする選手の姿から、はっきり理解できた。

それは、途切れない「ベンチを含めたチームの声」と厳しい場面でも失わない「チームの明るさ」である。続く試合の2チームの戦いぶりを含めても六南小が抜きん出ている。だから臆して怯むことなく、練習どおりのプレーができるのだ。

最後まで、もつれにもつれた第1セットであったが、勝負所で相手エースが大活躍。六南小はセットを失うものの、流れを渡し切らないことで光明が見えた。

崖っぷち。セットを落とせば6年生は引退となる勝負の2セット目が始まった。六南小は第1セットと同様に粘り強いバレーを展開するものの、A小はエースに加え、その他のプレーヤーも調子を上げ、序盤からじりじりと引き離しにかかる。

<六南小5-11相手>

中盤で大きな劣勢。けれども、このダブルスコアから六南小の挽回が始まる。
<6-11>➡<7-11>………<10-11> 連続得点でついに1点差。

この追い上げの起点となったのが8番の選手。セッターとして難しいボールを巧みな体裁きで操り、味方への正確なトスで攻撃へとつなげた。陰の立役者だ。

A小の選手に焦りが見える。対する六南小はベンチの盛り上がりも最高潮。流れは完全に六南小に傾いた。1点加えて同点に追いつけば、そのままの勢いでセット奪取まで六南小が押し切ると、会場にいた多くの人が思っていたことだろう。

両チームともに試合の大きな鍵を握る1点。いよいよ攻防が始まった。ラリーを繰り返し、A小のスパイクが僅かにエンドラインを超える。ラインズマンの旗が挙がり、「アウト」の宣告。主審が六南小側に手を挙げてポイント確定。同点だ。

その時だ。六南小の8番の選手が、主審に向かって手を挙げています。一瞬、歓声が消えた静寂の中で、8番の選手の声が体育館に響く。『ボールを触りました』

主審と副審さらに線審も、ボールタッチに気が付かなかった。直後の反応から、チームメイトも、ベンチも、監督でさえ気付かなかったのではないだろうかと思う。つまり、「ボールに触れてアウトになったこと」は、自分しか知らない。しかも、チームが波に乗って追い上げる流れの中、正直に申告することは、六南小を自ら不利な状況に導くことになる。それでも、8番の選手は正直に申告する道を選ぶ。

なかなかできることではない。勇気がいる選択である。彼女の勇気は極めて価値が高いが、それをチームメイトやベンチ、応援団がどう受け止めるかが大事だ。

結果が真逆になったことで『さすがに「がっくり」するな…』そう思った時、六南小のチームメイトが笑顔で8番の選手に近寄り、ポンポンと彼女の背中を叩きながら声を掛けた。その瞬間、わずかに残る8番の選手の陰りが、すっと消えた。そしてベンチ。連続得点の時以上の大きく明るい声がコート of 選手に向けられた。

逆境を勢いに変える底力。気持ちの切り替えといい、チームメイトを支える行為といい、応援団を含めたチームの一体感といい、本当によく鍛えられている。

8番の選手の行為を支えた「チーム力」。大人でも、なかなかできないだろう。これぞ「チームメイトとともに汗を流した成果」であり、「部活動の価値」だと言える。

第2セットを落として敗退した六南小。けれども彼女らの輝く(♡)は、光を失うことはない。そして彼女らが学んだように、後輩が受け継いでいくことだろう。

